

# 本校教育十年間の検討 I

——高校における外部中学入学者の適応についての資料——

## 研 究 部

### 1 研究目的

本校は昭和22年に岡崎高等師範学校の附属中学校として豊川の地に発足し、昭和27年に名古屋大学教育学部附属高等・中学校となり、昭和28年に名古屋の地に移転し、今日に至っている。

昭和28年以来制度的に大きく変わったのは教育研究上標準普通学級の構成が望ましいと考えられ、そのために従来の入学試験にかえて、抽せん選抜を主体にしたことである。(以前にも抽せんを加味して入試を行なってはいた。)入学選抜制度を学力試験で行うか、抽せんで行うかによって、入学者の学力・考え方・家庭環境などに大いに変化があり、これに対応してわれわれの教育もよりよい方向に向かって努力を重ねてきた。十年間の教育を振り返ってみて、当初の教育目標が達成されたか、目標自体に誤りはなかったか。また新たな問題点も多く発生しつつあり、この機に十分な検討と反省がなされなければならないと思われる。十年間の教育の反省として次の問題が挙げられよう。

#### (1) 当初の教育目標に関する問題点

- ・標準普通学級というものが構成されたかどうか。
- ・標準普通学級を構成するために抽せん選抜が妥当であったかどうか。
- ・従来の附属学校におけるエリート意識が払拭されたかどうか。
- ・これらの方法がわれわれの教育研究に最も妥当であったかどうか。
- ・教職員の熱意・意欲はどうであったか。

#### (2) 抽せん選抜によって発生した問題点

- ・生徒の能力差に対応して学習指導が適切であったかどうか。
- ・高校普通科として能力の欠けるものの対策は適切であったかどうか。
- ・中学より高校への選抜基準はどうあるべきか。
- ・抽せん選抜によるコンプレックスはもっていないかどうか。
- ・高校入学時に少数の外部中学出身者がうまく適応できるかどうか。
- ・中学より高校まで6ケ年の一貫教育はどのように

考えるべきか。

- ・名古屋市内において一般的に「抽せん学校」という皮相な見方が増えつつあるのをどうしたらよいか。

- ・中学における完全抽せん後10～15名程度が合格を放棄していく現状をどうするか。

- ・附中より高校入学時に優秀生徒が公立高校へ変っていこうという意志をもっている現状をどうするか。

#### (3) 一般的な問題点

- ・今日の社会において、どのような人間像を画いて教育すべきか。
- ・生徒指導の目標はどうか。
- ・生徒指導は適切であったかどうか。
- ・学力向上のための学習指導は適切であったかどうか。
- ・入学試験準備教育は万全が期せられていたかどうか。
- ・学級増をどの程度にし、学校規模の適正化を図るべきか。

以上のような多くの問題点をかかえており、しかも一つ一つに対して、われわれなりに個々に種々の解釈を持ってはいるが、総合的にしかも客観的に考えていかなければならないと思われる。過去の資料をもとにして、また調査、テストをもとにして、十年間の教育の検討を誤らないようにしたい。これらの検討が本校の将来の教育研究、入学選抜制度による生徒構成などを再考する資料にしたいと考えている。

## 2 外部中学出身者の適応について

上の問題点の中でとくに外部の中学校から附属高校へ入学してくる生徒の中で、いろいろな問題をもっているものがかかなり多い。

例えば

#### (1) 学校に批判的なものがある。

公立高と入試期日が異なるために、受けてみたところ合格したから止むを得ず入学した。受験するときは入学する積りはなかったというものの数は非常

本校教育十年間の検討 I

に多いようである。外部中学出身者の合格者より例年入学取り消しをするものが5～7名程度でいる。

(2) 最初から劣等感をもっているものがある。

希望の公立学校へは入学できそうもないが、うまく抽せんで合格したと思っているものに多い。着実な努力から勝ち得た入学でなく偶然の結果によるものと思っているのか無気力さが目立つ。

(3) 孤立感をもつものがある。

大多数が附中出身者であるために、外部出身者(約20名)が不必要に孤立感をもってくるようである。この結果、反抗的・非行的な言動をもつものもでてくる。

このよな現状を解決するために外部出身者合格基準が再三に亘り考えられ考慮されてきた。

ここに十年間の検討の資料として、一先ず外部中学出身者の本校入学後の適応の実態を挙げておく。完全な結論を得るまでに至っていないので総合的な判断は他の資料とともに次回に俟つほかはない。

### 3 調査とその結果

調査は昭和38年12月に、記名で行い、高校1年・2年・3年生を対象にした。次に示すのは調査項目とそれを集計した表である。

表中の文字・数字は次のようである。

附……附属中学出身者

外……外部中学出身者

5……非常によい

4……ややよい

3……普通

2……やや悪い

1……非常に悪い

M……平均値

調査 1. クラブ活動が活発に行われているか。

		5	4	3	2	1	M
1年	附 83人	4	30	37	12	0	3.3
	外 17	2	2	10	3	0	3.5
2年	附 78	5	18	32	17	6	3.0
	外 23	3	5	7	6	2	3.0
3年	附 79	3	18	38	16	4	3.0
	外 16	0	4	8	3	1	2.9

調査 2. 学校全体の雰囲気はよいか。

		5	4	3	2	1	M
1年	附 87人	3	34	33	13	4	3.2
	外 17	0	7	4	5	1	3.0
2年	附 78	2	23	29	19	5	2.9
	外 23	3	2	9	6	3	2.8
3年	附 81	5	27	36	11	2	3.3
	外 16	0	9	5	1	1	3.4

調査 3. ホームルームの雰囲気はよいか。

		5	4	3	2	1	M
1年	附 85人	5	34	26	15	5	3.2
	外 17	2	8	2	4	1	3.3
2年	附 78	3	16	30	21	8	2.8
	外 23	0	3	12	7	1	2.7
3年	附 63	12	34	11	5	1	3.8
	外 16	3	5	7	0	1	3.6

調査 4. 勉強はよくしているか。

		5	4	3	2	1	M
1年	附 85人	2	19	46	17	1	3.1
	外 17	0	5	9	3	0	3.1
2年	附 78	0	5	33	33	7	2.5
	外 23	0	0	8	10	5	2.1
3年	附 80	3	21	43	10	3	3.1
	外 16	0	1	12	2	1	2.8

調査 5. 学校全体の交友関係はうまくいっているか。

		5	4	3	2	1	M
1年	附 85人	13	49	22	1	0	3.9
	外 17	5	8	4	0	0	4.0
2年	附 79	5	31	33	8	2	3.4
	外 22	4	3	11	3	1	3.3
3年	附 78	7	38	26	4	3	3.5
	外 15	8	2	4	0	1	4.1

調査 6. 自分の友人関係はうまくいっているか。

		5	4	3	2	1	M	
1年	附	81	10	38	31	2	0	3.7
	外	17	0	6	8	3	0	3.2
2年	附	80	5	23	42	8	2	3.3
	外	23	3	11	6	2	1	3.6
3年	附	79	9	31	32	5	2	3.5
	外	15	4	6	3	1	1	3.7

クラブ活動・学校・ホームルームの雰囲気、勉強について調査したのは、これらを見る見方が附中出身者と比較して差異があるかどうか、差異があれば、外部出身者が何か学校に馴染めないものを持っているのではないかとのおねらいである。

調査 1. から 4. までに関しては殆ど附中出身者と外部出身者との間に差異はないと思われる。(ただ表 4. の 2 年だけは差が認められる)

このことからみて外部出身者が案外早く学校の雰囲気に融合していくことがわかる。

調査 5・6 の友人関係についてみると、学校全体の友人関係はうまくいっているようにみえて、あまり差はない。(3年に差ある)

しかし自分自身の友人関係については、1年生において外部生は附中生に比べて悪い。2年・3年になると逆によくなっていることについては注目に値する。友人関係は学校に適應するよりも難しいが、2年生になると、大休うまく行き、1年生時代に比べて非常によいという感じが外部生に働いているのではないだろうか。友人関係については学校としても、ホームルーム、行事、その他において常に考えなければならない問題であろう。

次に友人関係の精細な調査を下のように行なった。

調査 7. 次の表にあなたの友人を書いて下さい。

友人氏名	学校	学年	いつから

この調査表は外部生に最も問題の多い1年生の実態を中心に考えてみる。

表 1 は各人が挙げた友人の人数を示す。

表 2 は (他校友人数) / (全友人数) を示す。

例えば本校の友人だけを挙げたものは 5 人の友人のうち他校の友人を 2 名挙げたものは  $\frac{2}{5} = 0.4$  とする。

表 3 は友達となった時期 (年代) を示す。

表 1 友人の人員数

		人員	8	7	6	5	4	3	2	1	0	M
1年	附	86	2	2	3	40	14	12	10	3	0	4.2
	外	17	0	0	0	11	3	1	1	0	1	4.2
3年	附	73	0	1	0	29	16	16	10	7	4	3.6
	外	15	0	0	1	3	4	3	2	0	2	3.3

表 2 (他校友人数) / (全友人数)

		1	0.8	0.6	0.5	0.5	0.4	0.3	0.2	0	M	
1年	附	87	10	0	0	4	6	11	5	14	37	0.35
	外	18	3	2	1	2	1	5	1	1	2	0.52
3年	附	79	2	1	1	0	3	4	5	7	56	0.20
	外	13	1	0	0	0	2	1	4	0	5	0.30

表 3 友達となった時期

		幼時	小低	小高	中1	中2	中3	高1
1年	附	8	16	60	104	77	22	65
	外	2	0	9	12	12	8	30
1年	%附	2.3	4.5	17.0	29.4	23.9	6.2	18.3
	%外	2.9	0	12.3	15.1	15.1	10.9	41.1

1年において外部生はその友達の半数 (0.52) が他校の生徒になっている。附中生に比べてその数の大きいことがわかる。

しかし表 3 によれば外部生は高校 1 年で 41.1% も友人を作っている。これは殆ど本校の生徒であるはずである。それにしても表 2 にある如くまだ本校生徒内の友人の比率が少ないのである。しかしこれは附中出身者が既に現在の友人を中学時代にもっていて (表 3) 高校になって新たな友人を持たなくても、本校内の友人の比率が高いことを示している。しかし外部生がかなり急速に本校生徒内に馴染みつつあり、高校 3 年になれば殆んどその差が少なくなってきたといってよいであろう。

#### 4. まとめ

外部中学出身者が意外に早く学校の雰囲気には適應していくが、友人関係においてより問題が多いものと思われる。学校側としては、入学時におけるホームルーム、行事等を利用して、友達づくりについて真剣に考えなければならないと思われる。

外部中学出身者の問題は学力・性格・中学校の気風などの種々関係があり、総合的な観点から考えなければならないと思われるが、今回は上記資料からだけの考察に止めておきたい。(加藤十八・都築 亨)